

# 社会学部創設五十周年記念事業と企画展示について

永井良和

関西大学社会学部は、二〇一七年四月に創設五十周年を迎えた。

大学の関係部署および法人の理解・協力のもと、社会学部では一連の記念事業を、年間を通じて開催した。一〇月二八日に挙行された記念式典および祝賀会は、多くの参加者が一堂に会する関連事業のクライマックスであったが、いっぽうで、学部の研究・教育の来し方をふりかえり、未来を構想するという意味では、その基礎となる年史の編集出版こそが最重要の事業であったことに疑いはない。この年史出版の経緯については、編集委員長をつとめた片桐新自教授の手になる本号別稿、それに、刊行された『関西大学社会学部50年史』そのものをご一読いただきたい。

式典や祝賀会のような催しは、人と人がおたがいに顔を合わせ、交流する貴重な機会ではある。しかしながら、会合は、そのとき、その場かぎりのものであって、いあわせなかつた人には経験として共有されない。これに対し、年史刊行は記録を将来に残すことで、式典や祝賀会に参加できなかった人びとに内容を伝える役目を果たす。そして、その両者の中間的な試みとして、今回、学部でとりくんだのは五十周

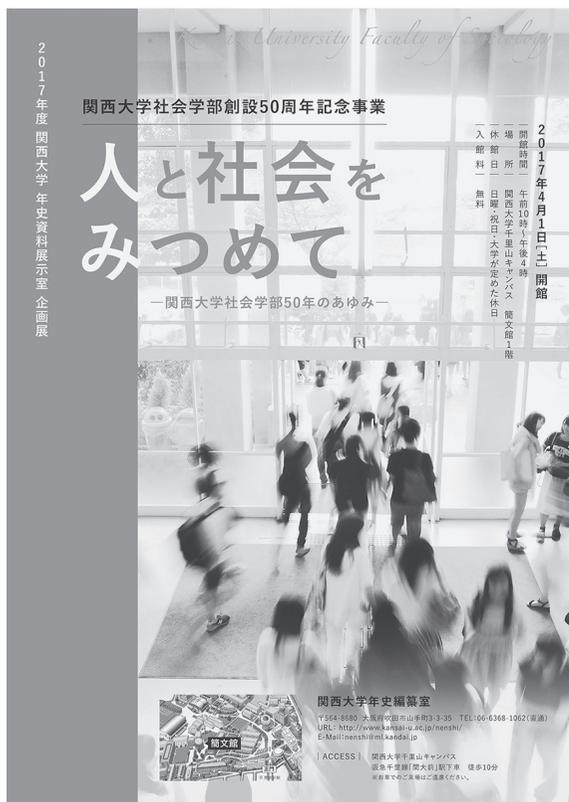
年を回顧するための企画展の実施であった。

社会学部の創設まで、また創設ののち今日までの歴史を回顧する展示の実施可能性は、もともと年史編纂室から社会学部に打診されたものであった。年史資料展示室には、これまでにも大学全体、あるいは特定の学部や併設校、クラブなどの周年記念展を開催してきた実績がある。年間の展示計画を立案する際に、五十周年を迎える社会学部に關する企画展を催すというアイデアが出されたことは、いっけん自然な流れにも映ろう。けれども、それが必ず実施できると保証されているわけではない。社会学部がさいわいにも記念展実施にこぎつけることができたのは、関係部署の理解や協力があつたこと、また関係者の惜しみない支援があつたからにはほかならない。

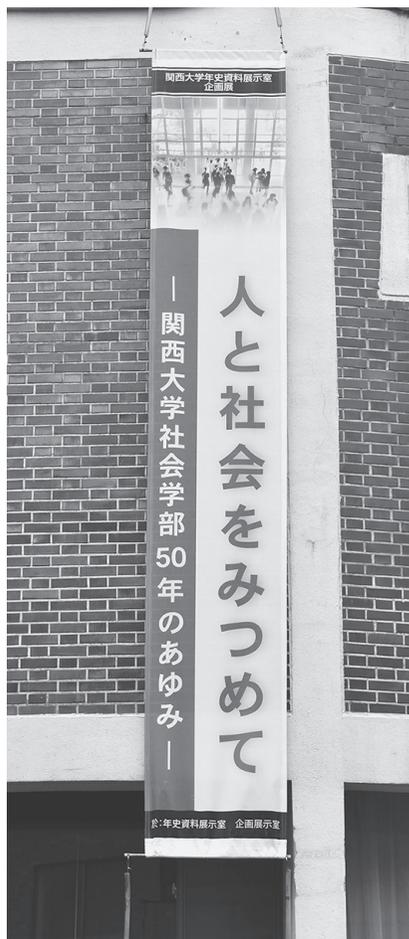
もともと、社会学部と博物館・年史編纂室とのあいだには今回の企画展開催の下地となる関係が醸成されていた。それは、第三学舎一号館（現在の呼称はA棟）の耐震改修工事をきっかけとしたものである。二〇一四年から着工され三年度にわたってすすめられた第三学舎の改修については、計画段階では全面的な立て替え案もあつた。だが、立



図版1 年史資料展示室企画展「人と社会をみつめて—関西大学社会学部50年のあゆみ—」展示のようす



図版3 企画展のポスター



図版2 簡文館壁面に掲出された垂れ幕

て替えとなれば、多くの学生・教職員がつかう千里山キャンパスのなかに、工事期間中の授業をするための代替教室を確保しなければならぬ。これは、現在の授業利用状況から判断して不可能と考えられた。また、キャンパス内に残されていた村野藤吾事務所設計の建物の多くが増改築にともなって破却され失われてきたなかで、第三学舎一号館をなんらかのかたちで保存したいという意向も学内の一部で共有されていた。

学舎改修工事の実施前、また施工着手後も、大学あるいは法人の管財部門・教務部門、および改修工事を担当した類設計事務所・清水建設と、社会学部執行部とが同じテーブルにつき、安全性・利便性をたかめつつ、どのようにして教育・研究に資する環境をつくりあげていくのかという課題に向きあい意見交換を重ねた。そのような協議の場から生まれたのが、一号館の保存的な改修という計画であった。社会学部では管財課や博物館に保存されていた竣工後の設計図などのデータを借り受け、社会学部学生の学び舎としてふさわしい改修の方向性を検討した。そして、第三学舎二階の一号館と四号館を接続する工事にあわせて、この空間をスタジオやギャラリーとして活用するという方向性が模索された。このアイデアは、諸条件への配慮が優先されたため最終的に縮小されたかたちになったものの、いわゆる座学から脱却し、主体的な学びの姿勢を涵養し、表現力を鍛え、学内外での交流を支える、そのような場を創出することが、近未来の社会学部の課題であることを意識させるものであった。学舎改修工事にかかわる一連の議論と作業は、社会学部の教職員に、学部の「歴史」を意識させる経験のひとつとなったといえるだろう。

また、片桐教授の別稿にもあるとおり、年史の編集作業についても早くから準備がすすめられていた。年史編纂室との連携が整っていたことが、企画展の実施に際して、資料収集や展示パネルの解説文の作成などで生じる実務上の苦勞を大幅に削減した。年史編集作業と企画展の実施とは別々の事業ではない。年史編集の作業が先行していたからこそ、企画展が実現したという点は見逃せない。

とはいうものの、社会学部が展示の準備をするための期間はかぎられていた。実質的には、二〇一七年一月からの三か月ほどのあいだに、展示候補資料の調査と借用、説明パネルのテキスト・図版の編集、学舎の建築模型製作の委託、必要な消耗品の購入などが並行してすすめられた。学部においては、期末試験や入学試験、年度末の繁忙期と重なり、教職員が準備に割くことのできる時間がじゅうぶんとはいえない状況であった。

省力のために、編集作業中の『50年史』の未決定稿のなかから、編集委員会の許可を得てテキスト、図版、年表などを借用し、あらためて展示用に編集しなおした。パネルの枚数にも、一枚あたりのパネルの文字数にも制約がある。どの項目を拾い、どの項目を捨てるのか。ていねいに記述したい複雑な経緯を、誤解が生じないように、しかし的確に要約することが可能か。作業にあたっては、さまざまな気苦勞が伴った。しかし、それもいまとなっては楽しい記憶であり、そのような作業を経たからこそ、のちの式典の意味あいや位置づけも明確になったものと思う。

読まれることを想定した冊子体の『50年史』と、実物資料を見せる展示としての企画展では、構成も素材も、おのずと異なるものとなっ

た。たとえば年表は、年史の原稿を抜粋するかたちで作成できるが、現職教員の研究の全体を視覚的に見せるためのパネルをつくる作業では、年史の原稿に素材がない。専任教員の著作物を学部ホームページや学術情報データベースで確認し、その本を借用する。複数の著作があるばあいには、研究成果としての重要性とは別の基準、すなわちパネルに並べた際の視覚的なバランスも考慮して選定した。さらにその書影をスキャナーでデータ化し、大きさを揃え、書誌情報を添えるという地道な作業が行われた。こうなるとさすがに教員だけの手では足りず、アルバイトの力を借りることになり、パネルの製作を発注した業者には締め切り日時よりも遅い入稿や再三再四にわたる校正などで無理をきいていただくことになった。

また、建築意匠の専門で、村野藤吾についても研究をつづけておられる環境都市工学部の橋寺知子准教授におねがいし、建築意匠研究室の大学院生・笠井健悟さんに第三学舎の建築模型の製作を委託した。展示開始の間に合うようにという無茶な要望に応えていただくことができたのも、博物館・年史編纂室ですでに村野の事績にかかわる展示の経験があり、建物の保存についての調査や資料の収集が蓄積されていたからであろう。博物館・年史編纂室の業務をとおして学部の壁を越えた協力ができた点は、望外の喜びである。

いっぽう、社会学部メディア専攻の村田麻里子教授がミュージアム研究の専門家であり、本学の博物館運営委員をつとめた経験があったことも、展示の質を高めることにつながった。展示品を並べることがゴールではなく、展示を社会学部の在学生の学びにいかにつぎつけるかということまでを見すえたものとして、今回の企画展は考えられた。



図版4 第三学舎建築模型

具体的には、展示の公開後、ゼミや少人数クラスを単位として、授業で在學生が展示を見学、そして課題をこなすというかたちである。第一学舎の學生・教職員や学芸員資格関連科目の受講生ならば博物館も身近な存在だが、他の学舎の関係者にとってはやや縁遠い。こういった展示の活用が、大学の中にある施設を利用するきっかけになればと思う。なお、授業での活用事例については、村田教授と、劉雪雁准教授による報告をお読みいただきたい。もちろんじゅうぶんな準備ができたわけではなかったため、今回の試みを起点として新たな工夫につなげるこそが課題だといえる。しかしながら、この企画展が学部での教育に寄与したという点は特筆に値する。

ところで、年史資料展示室における展示は一年間と決まっていた。長期にわたる展示なので、当初は春学期・秋学期で一部展示替えをする可能性が考慮された。しかし、最終的には、年度を通じて展示品は固定され、入れ替えはなされていない。ひとつには、上記のような授業との連動があったため展示品の差し替えを控えたという事情もある。いっぽう、収集した資料の偏り（印刷された紙モノが多くを占めた）から、立体的な展開に限度があったこともある。また、展示替えの準備をする時間がとれなかったのも実情だ。

資料を提供したいという卒業生、退職者からの連絡はやまず、企画展開幕後も貴重なものが学部長室に集まった。たとえば、社会学部同窓会から、学部創設初期の資料（一期生が授業でつかっていた教科書など）が提供された。岩見和彦名誉教授からは社会学部の授業のようすを伝えるNHKのニュース映像を収めたビデオテープが、また広報課の職員からは第三学舎竣工時の記録映画をデジタル化したファイル

が提供された。これらを無駄にしたいくないという思いもあり、映像についてはあらためてデジタル化・編集して、一〇月二八日の記念式典・祝賀会当日に会場で映写し参加者に見ていただいた。

年史資料展示室の企画展スペースに収まりきらなかった資料を活用するため、第三学舎に設けられた「ギャラリーゾーン」で展示することにした。

先にしるしたとおり、耐震改修工事のなかで、第三学舎にはギャラリーゾーンの設置が想定されており、そのための設備がほどこされていた。たとえば、長い廊下と壁面を利用してパネルを吊ることができるようにと、取りつけ用のレールが用意されていた（じつさいには未使用のままおかれていた）。また、一号館二階の天井にもスポットライトを取りつけられるレールや電源がある。こういったものを活用し、将来的に學生や教員が独自の展示を立案・実施できるようにとのねがから、追加の備品を購入することが決まった。ポスターフレームや、固定のための金具、ワイヤーなどである。

これらで、パネル展示ができる準備は整った。しかしながら、貴重な資料を収めつつ、観覧者に間近に見せるための展示ケースが社会学部にはない。記念事業のための特別の予算で恒久的な備品を購入することは趣旨に合わないので断念せざるをえないとあきらめかけていたところ、博物館に古い展示ケースで用いられていないものがあるとの話をうかがった。うち二台を社会学部に移管していただき、ギャラリーゾーンにおくことができた。

年史編纂室での展示の開始（二〇一七年四月一日）よりもやや遅れ、四月一日、第三学舎での関連展示にこぎつけた。



図版5 第三学舎ギャラリーゾーンの設  
営作業をする社会学部教員

展示ケース二台に、「社会調査のいまむかし」というかたちで、社会学部の実習室などで保管されていた古い調査や研究のための器具（手回し計算機やパンチカード、録音起こしのためのトランスクリイバー、初期のアップルコンピュータなど）を入れ、それを展示した。

また、ちょうど二〇一六年二月に博物館において企画展「関西大学と村野藤吾―設計図・建築写真・絵画」が開催されたのを機に作成された展示パネルを借用することにした。第三学舎竣工から間もないころの学舎内外の風景を写した多比良敏雄氏撮影になる写真パネルである。これを年度末・年度始めの休みを利用して、有志教員が協力して展示した。なお、社会学部教授会ではギャラリーゾーン利用のための申し合わせをつくり、今後の研究・教育に活用できるようにしくみを整えた。くわえて、社会学部同窓会からは展示に利用できるボード二台をご寄贈いただいた。



図版6 第三学舎ギャラリーゾーンでの写真  
パネル展示



図版7 学部独自の展示「社会調査のいまむかし」（2017年4月から10月まで）

学舎を利用する学生・教員はもちろん、非常勤の授業担当者や教育後援会で来訪した在学生の家族、母校に立ち寄った卒業生、さらに八月上旬にはオープンキャンパスにつめかける受験生やその家族にも、ひろく展示を見てもらうことができるようになった。

秋学期には、二台あるケースのうちの一台について展示替えを行い、社会学部の授業で用いられた教科書を、新旧が比較できるようなかたちで呈示した。古いものは、先述の一期生から提供されたものである。また、新しいものは現職教員が執筆したものを中心に選択した。さらに社会学部が受験生向けに作成した初期のポスター型パンフレットや、広報用ポスターなども額装して掲出した。この二期目の展示は、創設五十周年記念式典の当日に、来訪者に見学してもらった。

以上が、五十周年記念事業の一環として社会学部で実施した関連展示の概要である。あらためて、関係各位のご理解、ご協力に感謝したい。

最後になるが、これらの試みが、学部の学生・教職員にとって帰属意識を高めるイベント、あるいは対外的な広報の手段としてのみ理解されるのではなく、みずからの学びのありかたを反省する機会として、また、その先にある社会への貢献について思いをめぐらせる機会としてとらえられることを期待する。



図版 8 学部での展示・記念式典を前に一部を展示替え、新たに「テキストのうつりかわり」を追加。右端は、社会学部同窓会から寄贈された展示用ボード。

【資料】社会学部創設五十周年記念事業一覽

二〇一七年

四月一日 社会学部創設五十周年記念年史資料展示室企画展

「人と社会をみつめて―関西大学社会学部50年のあゆみ―」

(簡文館・年史資料展示室 二〇一八年三月二四日まで)

四月二一日 社会学部創設五十周年記念社会学部企画展示「社会調査の

いまむかし」

写真・図面パネル展「村野藤吾の第3学舎」

(第二学舎二階ギャラリーゾーン)

二〇一七年一〇月に一部展示替え

五月一九日

社会学部創設五十周年記念学術講演会(心理学専攻)  
「ファシズム、テロリズム、そしてマインドコントロールの  
社会心理学」

西田公昭氏(立正大学心理学部教授)

(第三学舎A二〇二教室)

五月二六日

社会学部創設五十周年記念学術講演会(メディア専攻)  
「浪曲のRock you〜グローバルな時代にこそ伝統芸能を〜」

春野恵子氏(浪曲師)

(第三学舎 ソシオAV大ホール)

六月六日

社会学部創設五十周年記念学術講演会(メディア専攻)  
「(インターネット)の次に来るもの  
メディアの預言者ケヴィン・ケリーと考える21世紀のメディア

ア」

服部桂氏(元朝日新聞科学部記者・関西大学客員教授)

(第三学舎 ソシオAV大ホール)

七月一日〜二日

社会学部創設五十周年記念国際シンポジウム(メディア専

攻)

「Are You Second Offline? ― The Diversity of Post-Mobile  
Society ―」

J. E. カッツ氏(アメリカ Boston University 教授)

L. ヒョース氏(オーストラリア RMIT University 特別教

授)

M. ビョルン氏(スウェーデン Ericsson inc. 消費者研究所

研究室長/Lund University 連携教授)

J. ファーマン氏(アメリカ University of Maryland 准教

授)

主催・関西大学社会学部メディア専攻・公益財団法人情報通  
信学会  
(関西大学梅田キャンパス KANDAI Me RISE)

九月三〇日

一〇月二二日

『関西大学社会学部50年史』刊行  
社会学部創設五十周年記念パネルディスカッション(メディ  
ア専攻)

【パネリスト】

朝日放送常務取締役(経理・経営戦略・関連事業担当) 山本

晋也氏

関西テレビ放送常務取締役(総務局・コンテンツビジネス局

担当) 谷口泰規氏

テレビ大阪執行役員(経営戦略局長) 北浜義信氏

毎日放送MBSメディアホールディングス取締役(メディア

戦略担当) 藤沢雅実氏

読賣テレビ放送取締役(労務担当、働き方改革・総務担当補

佐) 吉田満氏

【コーディネーター】黒田勇（メディア専攻）

（関西大学梅田キャンパス KANDAI Me RISE）

一〇月二八日 関西大学社会学部創設五十周年記念式典祝賀会

記念式典（第三学舎「ソシオAV大ホール」）

祝賀会（凜風館二階「デイノア」）

十一月三日 社会学部創設五十周年記念学術講演会（社会システムデザイン専攻）

「新薬づくりの人間ドラマ」

豊田繁氏（大阪医薬品協会国際連携アドバイザー）

BIGホール100（第二学舎四号館）

十一月三日 社会学部創設五十周年記念学術講演会（社会学専攻）

国連「持続可能な開発目標（SDGs）」—— No One Left Behind

——と国内政策「データに基づいた福祉政策づくり」

勝又幸子氏（一般社団法人ヒューネットアカデミー代表理事、元国立社会保障・人口問題研究所情報調査分析部長）

（第三学舎A三〇一教室）

十二月二日～三日 社会学部創設五十周年記念シンポジウム

第二九回大会日本ポピュラー音楽学会（メディア専攻）

音楽映像をどう捉えるか——一九七〇年代以降のポピュラー音楽史のために——

【パネリスト】

住友利行氏（元テレビ神奈川プロデューサー）

稲増龍夫氏（法政大学）

輪島裕介氏（大阪大学）

【司会】小川博司（メディア専攻）

（関西大学梅田キャンパス KANDAI Me RISE）

二月一九日 社会学部創設五十周年記念学術講演会（メディア専攻）

原発とメディア——テレビは何をどう伝えてきたのか——

市村元氏（「地方の時代」映像祭プロデューサー）

（第三学舎A三〇一教室）

（ながい よしかず・関西大学社会学部教授／社会学部長）